

演習 I

女子大生の父親と母親に対する依存と孤独感との関連

B 班 A07CB075 A07CB076 A08CB005
A08CB050 A10CB504

問題

大学生になってからの環境の変化はとても大きいものだといえる。高等教育までは自宅から学校まで通学していたが、大学生になり家族と離れて一人暮らしを始めた学生も多いのではないだろうか。一人暮らしは、親から離れられることで、自由で気楽なイメージがある反面、なにかトラブルが起きた時に自分の力で対処しなくてはならず「こんな時に家族がいたらいいのに。」「寂しい。」と感じてしまうのではないだろうか。また、一人暮らしでなくてもクラスという決められたグループがなくなり、担任の教師がいなくなり、授業が自由選択になるという学校生活の変化から、自らの意思で決定し行動していかねばならないということがひしひしと感ぜられるだろう。このようなことから大学生は孤独感を感じているのではないだろうか。

一般の人々に孤独感について質問をしたら、現在孤独であろうとなかろうと難なくそれについて答えることができるだろう。我々はおそらく孤独に関して正確に同じ概念を持っているわけではないが、直感的に孤独感がどのようなものかを知っているのだ。よって我々は、社会の中で他者と関わりながら成長していく過程で誰しも孤独感を味わうのだ。

幼児期になると、愛情を持って世話をしてくれる人から引き離されるのではないかとという不安を経験する。児童期になると幼稚園や保育所に通い、さらに学校へ通うようになる。そこでは、新しい活動範囲の広がりに対する不安と期待を抱きつつ、同じ境遇である仲間と友情を育もうと試みる。合宿に出かけたり、引っ越しをしたり、その際の興奮には孤独感がついてくるものである。

Perlman&Peplau (1981)は、「孤独感とは、個人の社会的関係のネットワークに量的であれ、質的であれ重大な欠損が生じたときに生起する不快な経験である」と定義している。このことから、個人の最も小さい社会的関係のネットワークである家族の中において、本研究では親に対する依存性となにか関係があるのではないかという結論に至った。

依存性とは何か、あるいは、何を依存性とよぶかはいたってあいまいである。が、従来の研究のだいたい的一致点は、「人間対人間の行動についていうもので、社会的行動のひとつの形式であって、他人との接触あるいは他人からの養護によって生ずる満足に向けられた行動をあらわす」ということになる (Hartup W.W.,1963)。従来、依存と自立を両極にとらえ、依存から脱却し自立することが、子どもから大人になるためのひとつの要件であるとされてきた。けれども、成熟した依存性の獲得こそが人間の発達にとってより重要であ

ることが明らかとなってきた（廣井,2002）。

幼児期や児童期の依存対象は、両親であることが多く、青年の依存対象は、中学生、高校生、大学生とすすむにつれて、男女ともに、友人や自己を依存対象とする順位が上昇する一方で、親に対する依存度は、女子と母親の関係を除いて低くなる傾向がみられる（加藤,1977）。また高橋(1968)は、大学生女子における依存性について、「現象的には自立的であると考えられている大学生においても、少なくとも女子では依存要求が認められる。」と述べている。単一の焦点になる依存対象としては、母親、愛情の対象、尊敬する人などが多く、同性の親友や父親は少ない。母親は単一の焦点となる傾向が大きく、複数焦点型でも、焦点のひとはほとんど母親であり、親密度が高く、女子青年と母親との情緒的結合は強いといえる。

今回は、発達に伴って変容していく依存と成長過程で経験する孤独感をふまえて、女子大生の父親・母親に対する依存と女子大生自身の孤独感の関連を研究テーマとして取り上げた。

目的

本研究では、父親・母親に対する依存と孤独感との関連を調査することを目的とした。同時に父親・母親への依存の違いを比較、検討していくことを目的とした。

仮説

家族は個人の最も小さい社会的関係のネットワークであり、親に対して依存することによって社会への情緒的安定を保とうとすると考えられる。そのため、親に対する依存が強ければ、孤独感が弱いという仮説を立てた。また、女子は父親よりも母親に対する依存が強いという仮説を立てた。

方法

目的に沿って、女子大生を対象にして、質問紙調査を行った。以下、実験参加者、調査の実施方法、質問紙の構成を説明する。

1. 調査対象者および調査時期

愛知県内の大学に通う女子大生 107 名を対象に質問紙を配布し回答をしてもらった。欠損データ 16 名は除外した。有効回答数は 89 名、有効回答率は 83%であった。平均年齢は 19.48 歳(SD 4.51)であった。調査は 2010 年 5 月 26 日に大学の講義時間内に実施した。所要時間は 20 分であった。

2. 手続き

各尺度からなる質問紙を「人間関係論Ⅰ」を受講している女子大生を対象に講義時間中に配布し、質問紙法を用いて、集合調査形式にて実施した。

3. 実施する調査内容

新たに作成した親への依存尺度 60 項目(同じ質問 30 問で母親に対するものと父親に対するもの)及び、落合 (1983) の孤独感尺度 16 項目を使用した。さらに、父親と母親の存命か否かや一人暮らしか実家暮らしかの居住形態などを問うフェイスシートを併せて使用した。このフェイスシートは実家暮らしと一人暮らしの割合を求めるために使用した。使用尺度の詳細は以下の通りである。

①親への依存尺度

今回新たに、親に対して依存している人とそうでない人の違いと、それぞれの感じている孤独感の違いとが関連しているかどうかを調べるために、「親への依存尺度」を作成した。これは「日々共に暮らす親(父・母)という存在に対し、身体面・精神面・身体及び精神面・経済面に表れる依存的な言動・思考」という概念的定義のもと、女子大生 5 名の自由記述をもとに作成したものである。身体的依存尺度、精神的依存尺度、身体的及び精神的依存尺度、経済的依存尺度の 4 つの下位尺度を想定した全 30 項目の質問紙である(付表 1)。なお、各項目に対し、1=「あてはまらない」、2=「ややあてはまらない」、3=「どちらともいえない」、4=「ややあてはまる」、5=「あてはまる」の 5 段階で評価を行ってもらうものとした。

②孤独感尺度

落合 (1983) により作成された孤独感尺度を用いた。この尺度は青年を対象にした孤独感の類型を判別するための尺度である。本尺度は 16 項目からなり、2 軸かなる人間観(縦軸: 人間同士が共感可能かどうか、横軸: 人間の個別性の自覚がなされているかどうか)によって、孤独のとらえ方が 4 種類に判別され、それらは発達的に変化すると仮定した上で作成された質問紙である。(付表 2)。各項目に対し、1=「はい」、2=「どちらかというとはい」、3=「どちらともいえない」、4=「どちらかというといいえ」、5=「いいえ」の 5 段階で評価を行ってもらうものとした。

結果

フェイスシートで居住形態と母親と父親の存命か否かを回答してもらった。その結果、実家暮らし 75 名、一人暮らし 14 名、母親の存命 88 名、父親の存命 85 名であった。

1. 孤独感尺度の分析

孤独感尺度 16 項目の平均値、標準偏差を算出した。その結果、平均 2.34、SD1.20 であった。さらに、「私のことに親身に相談相手になってくれる人はいないと思う」「人間は、他人の喜びや悩みを一緒に味わうことができると思う」「私の考えや感じを何人かの人はわかってくれると思う」「私の考えや感じを誰もわかってくれないと思う」「自分の問題は、

最後は、自分ひとりでしかないと思う」「私の生き方誰もわかってくれはしないと思う」「私の人生と同じ人生は、過去にも未来にもないと思う」「誰も私をわかってくれないと、私は感じている」「人間は、互いに相手の気持ちをわかりあえると思う」「どんな親しい人も、結局、自分とは別個の人間であると思う」の 10 項目でフロア効果がみられた。 α 係数を算出したところ、 $\alpha=0.23$ であった。孤独感尺度は落合（1983）により信頼性および、妥当性が確認されていたにも関わらず、今回の調査では十分な結果が得られなかった。

2. 親への依存尺度と下位尺度の分析および下位尺度間の関連

まず、親への依存尺度 30 項目の平均値、標準偏差を基に、母親と父親それぞれ別々に項目分析を行った。その結果、母親においては、「食事の用意はやってもらう」「お弁当を作ってもらおう」「洗濯はやってもらう」「メールをする」「電話をする」「進路についての相談をする」「携帯代は自分で払っている」「買い物と一緒にいってついでに何か買ってもらおう」「交通費をもらっている」の 9 項目で天井効果がみられた。また、「自分の部屋の掃除は自分でやる」「外出時に手をつなぐ」「朝は目覚まし時計などで起きる」「自分の行動は自分で決める」「恋愛についての相談をする」「常に連絡を取らなくても不安ではない」「お小遣いをもらっている」「自分の趣味に使うお金をもらっている」「食事は作ってもらったもの以外食べない」「通帳、印鑑などの自分の貴重品は自分で管理している」「書類を書くことなど面倒なことはやってもらう」の 11 項目でフロア効果がみられた。しかし、効果が現れたもの全てを削除すると尺度としての成り立たないことと、分析に支障が生じると判断し、これらの項目の削除を行わなかった。父親においては、「一緒にいないと不安だ」「携帯代は自分で払っている」の 2 項目で天井効果がみられた。また、「食事の用意はやってもらう」「自分の部屋の掃除は自分でやる」「お弁当を作ってもらおう」「外出時に手をつなぐ」「朝は目覚まし時計などで起きる」「自分でできるようなこともやってもらう」「洗濯はやってもらう」「友人についての相談をする」「メールをする」「アルバイトについての相談をする」「電話をする」「体調についての相談をする」「自分の行動は自分で決める」「恋愛についての相談をする」「学校についての相談をする」「常に連絡を取らなくても不安ではない」「衣服を買ってもらおう」「買い物と一緒にいってついでに何か買ってもらおう」「お小遣いをもらっている」「交通費をもらっている」「自分の趣味に使うお金をもらっている」「美容院代をもらっている」「食事は作ってもらったもの以外食べない」「通帳、印鑑など自分の貴重品は自分で管理している」「病院に付き添ってもらおう」「書類を書くことなど面倒なことはやってもらう」の 26 項目でフロア効果がみられた。これらの項目も削除を行うと尺度としての成り立たないことと、考察の必要があると考え、削除を行わなかった。

次に、この 30 項目に対して、主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。4 因子に設定し行った結果、固有値の変化は、8.49、2.96、2.07、2.00、1.23…と示された。しかし、内容妥当性の観点から 3 因子構造が妥当であると考えた。Promax 回転後の因子パターンを Table1 に示した。

Table1 女子大生における父親・母親に対する依存尺度の因子分析結果 (Promax回転後の因子パターン)

項目内容	因子			
	1	2	3	4★
恋愛についての相談をする	.863	-.071	-.254	.114
学校についての相談をする	.848	-.025	-.085	-.044
友人についての相談をする	.808	.193	-.228	.041
電話をする	.689	-.136	.200	-.130
アルバイトについての相談をする	.658	.140	.106	-.200
*一緒にいないと不安だ	-.631	-.019	-.080	-.295
メールをする	.591	.032	.111	-.195
進路についての相談をする	.568	.173	.047	-.100
体調についての相談をする	.541	.264	.085	-.041
外出時に手をつなぐ	.381	-.230	.060	.149
洗濯はやってもらう	.016	.953	-.042	-.054
食事の用意はやってもらう	-.029	.951	-.069	.056
お弁当を作ってもらう	-.027	.883	-.092	.030
自分でできるようなこともやってもらう	.087	.392	-.009	.311
食事は作ってもらったもの以外食べない	.082	.153	-.123	.056
お小遣いをもらっている	.038	-.261	.786	-.027
自分の趣味に使うお金をもらっている	.017	-.182	.717	.137
交通費をもらっている	.043	.067	.694	-.176
美容院代をもらっている	-.114	.212	.636	.023
衣服を買ってもらう	-.021	.310	.525	.049
*携帯代は自分で払っている	-.082	-.052	.393	-.097
病院に付き添ってもらう	.064	.360	.367	.058
買い物と一緒に行ってついでに何か買ってもらう	.209	.226	.353	.032
どこかへ出かけるときは送迎してもらう	-.045	-.191	.343	.214
*通帳、印鑑など自分の貴重品は自分で管理している	-.020	-.045	.040	.556
*自分の行動は自分で決める	-.052	.130	-.015	.506
*自分の部屋の掃除は自分でやる	-.062	.111	-.059	.497
*朝は目覚まし時計などで起きる。	-.124	.102	-.095	.480
*常に連絡を取らなくても不安ではない	.349	-.200	.016	.446
書類を書くことなど面倒なことはやってもらう	-.092	.166	.321	.334

*逆転項目

★ $\alpha=.64$ であったため、今回は削除した。

因子負荷量が 0.30 以上という基準を設定し、それに満たなかった「食事は作ってもらったもの以外食べない」を除いた。また、因子分析を行った後、内的整合性を検討するために $\alpha=.70$ 以上という基準を設定し、各下位尺度の α 係数を算出した。その結果、第 4 因子は $\alpha=.64$ と十分な値が得られなかったため、今回は削除し、以後の分析から除外した。

第 1 因子は 10 項目で構成されており、「恋愛についての相談をする」や「友人についての相談をする」など、精神面での依存を表す項目が高い負荷量を示していた。そこで、「精神的依存」因子と命名した。

第 2 因子は 4 項目で構成されており、「洗濯はやってもらう」や「食事の用意はやってもらう」など、身の回りの事項を自分でやらず、親にやってもらうということを表す項目が高い負荷量を示していた。そこで、「身体的依存」因子と命名した。

第3因子は9項目で構成されており、「お小遣いをもらっている」や「自分の趣味に使うお金をもらっている」など、金銭面での依存を表す項目が高い負荷量を示していた。そこで、「経済的依存」因子と命名した。なお、3因子の累積寄与率は45.06%であった。

親への依存尺度の3つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「精神的依存」下位尺度得点（平均2.65、SD.73）、「身体的依存」下位尺度得点（平均2.46、SD.80）、「経済的依存」下位尺度得点（平均2.52、SD.97）とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「精神的依存」で $\alpha=.82$ 、「身体的依存」 $\alpha=.88$ 、「経済的依存」 $\alpha=.81$ であり、十分な値が得られた。親への依存尺度の下位尺度間の相関および、孤独感尺度、平均値、SD、 α 係数をTable2に示した。

Table2 親への依存尺度の下位尺度間と孤独感尺度の相関および、平均値、SD、 α 係数

	精神的	身体的	経済的	孤独感	平均値	SD	α 係数
母親							
精神的	—	.04	.03	-.14	3.17	.75	.82
身体的		—	.26*	-.19	3.63	1.12	.88
経済的			—	-.05	2.34	.34	.81
孤独感				—	2.34	.34	.23
父親							
精神的	—	.12	.47**	.01	2.12	.72	.82
身体的		—	.15	.12	1.29	.48	.88
経済的			—	-.07	1.76	.88	.81
孤独感				—	2.34	.34	.23

* $p<.05$ ** $p<.01$

Table2より、母親について、「精神的依存」と「身体的依存」、「精神的依存」と「経済的依存」との間には相関がみられなかった。けれども、「身体的依存」と「経済的依存」には低い正の相関がみられた。父親について、「精神的依存」と「身体的依存」、「身体的依存」と「経済的依存」との間には相関がみられなかった。けれども、「精神的依存」と「経済的依存」との間には正の高い相関がみられた。

親への依存尺度の3つの下位尺度と、孤独感尺度の相関係数を算出し、Table2に示した。その結果、母親について、「精神的依存」は $r=-.14$ 、「身体的依存」は $r=-.19$ 、「経済的依存」は $r=-.05$ となり、相関はみられなかった。次に、父親について、「精神的依存」は $r=.01$ 、「身体的依存」は $r=.12$ 、「経済的依存」は $r=-.07$ となり、相関はみられなかった。以上より、親への依存尺度と孤独感尺度の間では相関はみられなかった。

4. 母親と父親に対する依存度の比較および、検討

親への依存尺度について、対応のある t 検定を行い、その結果を Table3 に示した。

Table3 親への依存尺度の母親と父親の対応のあるt検定による比較

		平均値	標準偏差	t 値	自由度	有意確立(両側)
精神的依存	母親-父親	3.16	.75	13.00	84	.00
		2.12	.72			
身体的依存	母親-父親	3.64	1.14	19.16	84	.00
		1.29	.48			
経済的依存	母親-父親	3.27	1.03	8.93	84	.00
		2.44	.92			

Table3 より、各下位尺度の平均値は、「精神的依存」では母親が 3.16、父親が 2.12、「身体的依存」では母親が 3.64、父親が 1.29、「経済的依存」では母親が 3.27、父親が 2.44 となり、「精神的依存」では $t(84)=13.00(p<.01)$ 、「身体的依存」では $t(84)=19.16(p<.01)$ 、「経済的依存」では $t(84)=8.93(p<.01)$ となった。以上より 1%水準で有意な差がみられ、父親より母親に依存していることが示された。

考察

1. 親への依存尺度について

親への依存尺度 30 項目の平均値、標準偏差を算出した結果、母親では、「食事の用意はやってもらう」「お弁当を作ってもらう」「洗濯はやってもらう」「メールをする」「電話をする」「進路についての相談をする」「携帯代は自分で払っている」「買い物と一緒にいってついでに何か買ってもらう」「交通費をもらっている」の 9 項目で天井効果がみられた。その中でも特に、「食事の用意はやってもらう」「お弁当を作ってもらう」「洗濯はやってもらう」「携帯代は自分で払っている」の 4 項目は、実験参加者に実家暮らしが多くさらに社会的性差により、家事は母親がやるものという認識が強いため、天井効果がみられたと考えられる。また、「メールをする」「電話をする」の 2 項目は、どんな時に、どのような理由でメールや電話をするのか、詳しく記載しなかったために天井効果がみられたと考えられる。また、「携帯代は自分で払っている」「買い物と一緒にいってついでに何か買ってもらう」「交通費をもらっている」3 項目は、多くの実験参加者が実家で暮らしているため、身近な親に経済的な甘えが強く表れたと考えられる。

さらに、「自分の部屋の掃除は自分でやる」「外出時に手をつなぐ」「朝は目覚まし時計などで起きる」「自分の行動は自分で決める」「恋愛についての相談をする」「常に連絡を取らなくても不安ではない」「お小遣いをもらっている」「自分の趣味に使うお金をもらっている」「食事は作ってもらったもの以外食べない」「通帳、印鑑などの自分の貴重品は自分で管理している」「書類を書くことなど面倒なことはやってもらう」の 11 項目でフロア効果

がみられた。「自分の部屋の掃除は自分でやる」「外出時に手をつなぐ」「朝は目覚まし時計などで起きる」「自分の行動は自分で決める」の4項目は、一見すると依存度と関連がないように思われてしまったため、フロア効果がみられたと考えられる。「お小遣いをもらっている」「自分の趣味に使うお金をもらっている」の2項目は、大学生になり、アルバイトを始める人が多く、母親からお金をもらって何かをすることが減ったため、フロア効果がみられたと考えられる。しかし、「通帳、印鑑などの自分の貴重品は自分で管理している」でフロア効果がみられたのは、保護者である母親に貴重品を管理してもらった方が、安心感が得られるためではないだろうか。「恋愛についての相談をする」は、母親に相談するより、同じ年代の友人に話した方が、より適切なアドバイスが得られると考えられるため、母親に話すよりも友人に話したいという気持ちが強く働くことが考えられる。逆転項目である「常に連絡を取らなくても不安ではない」は実家暮らしが多く、毎日顔を合わせるため不安だと感じなかったと考えられる。

父親では、「一緒にいないと不安だ」「携帯代は自分で払っている」の2項目で天井効果がみられた。これは、父親と一緒にいないのが当たり前のことで、不安だと感じる人が少ないことと、携帯電話は親と一緒に契約していることが多いため、自分で支払っている人が少ないことが考えられる。また、「食事の用意はやってもらう」「自分の部屋の掃除は自分でやる」「お弁当を作ってもらおう」「外出時に手をつなぐ」「朝は目覚まし時計などで起きる」「自分でできるようなこともやってもらう」「洗濯はやってもらう」「友人についての相談をする」「メールをする」「アルバイトについての相談をする」「電話をする」「体調についての相談をする」「自分の行動は自分で決める」「恋愛についての行動をする」「学校についての行動をする」「常に連絡を取らなくても不安ではない」「衣服を買ってもらおう」「買い物と一緒にいってついでに何か買ってもらおう」「お小遣いをもらっている」「交通費をもらっている」「自分の趣味に使うお金をもらっている」「美容院代をもらっている」「食事は作ってもらったもの以外食べない」「通帳、印鑑など自分の貴重品は自分で管理している」「病院に付き添ってもらおう」「書類を書くことなど面倒なことはやってもらう」の26項目でフロア効果がみられた。父親が外で働き、母親が家庭で家事をするという性役割が定着しており、父親は仕事で帰宅する時間が遅くなり、娘と一緒に過ごす時間が少ないことが理由として考えられる。また、父親の年齢は40歳から50歳代ということが推測されるが、その年代の会社での立場は、業務を完璧にこなし、役職に付く人も多く、会社側からも期待されることが多いだろう。さらに、上司の顔色をうかがい、後輩の意見をうかがい指導や教育を行っていく、上司と部下との間で板挟み状態であると考えられる。「お小遣いをもらっている」「交通費をもらっている」「自分の趣味に使うお金をもらっている」は母親の場合と同様の理由からフロア効果がみられたと考えられる。天井効果やフロア効果が多くみられた総合的な原因として実験対象者とした女子大生の同居率が高いという点と、平均年齢が19歳で高校を卒業して間もないため、精神面での著しい変化がみられなかったという点が考えられる。

2. 親への依存尺度の下位尺度間相関と孤独感尺度との関連性

親への依存尺度の下位尺度間の相関を求めた結果、母親については、「身体的依存」と「経済的依存」には低い正の相関がみられた。身体的依存の下位尺度項目で家事に関する項目が多く、また経済的依存では大学生という立場から自分ひとりではどうにもならないということで正の相関が得られたのだと考えられる。父親については、「精神的依存」と「経済的依存」との間には正の高い相関がみられた。これは、一般的に重要な決定に対し女性より男性の方が決断力があると考えられているため、頼りになるということや、相談事があると最終的な判断を仰ぎ安心感を得たいということが考えられる。また、母親という同性からではない、異性という新たな視点からの意見を求めていることが推測される。さらに、誰かに相談することにより、不測の事態が生じたときに責任転嫁できるという「甘えたい」という気持ちが生じていると考えられる。その他にも、父親は一家の稼ぎ手でもあるため、経済的な面は父親を差し置いて勝手に決めることはできないということが考えられる。

Table2 より、「親への依存尺度」と「孤独感尺度」には相関がみられなかった。これは、携帯電話の普及により、時間を気にせず、いつでもどこでも気軽にメールや通話ができる環境にあるからであろう。また、ブログや個人のホームページにより、相手の動向を簡単に確認できるため、いつでも誰かと繋がっているという感覚から孤独感を感じにくくなっていると考えられる。さらに、大学生の依存対象が親ではなく、友人や恋人に移行したためということも考えられる。

他の要因として、心理的離乳の発達を挙げることができる。西平（1990）は心理的離乳を、児童が青年となり、青年が成人となり、さらに自己実現を果たすために必要な心理的な発達過程ととらえている。落合・佐藤（1996）の研究によると、大学生では、「子が親から信頼・承認されている親子関係」と「親が子を頼りにする親子関係」が母親と父親、共に多くなると明らかになった。これは、子どもを一人前になったと認め、子どもを信頼する親子関係が多くなることを表していると思われる。以上より、本研究において親への依存と孤独感に関連がみられなかったのは、社会との接点が多いために孤独感を感じにくくなっていることと、子どもばかりが親に依存するのではなく、親が子どもを一人の人間として認め、対等に接するようになったこと、依存対象が親から友人や恋人に移行することが考えられること、さらに、これまで支えてくれた恩返しのために、両親を支えたいという心理的な発達が生じているためだと考えられる。

3. 母親と父親に対する依存度の比較および、検討

T検定の結果、父親よりも母親に対して依存が高いといえる。女子大生にとって母親は生まれてから現在に至るまでの身近な存在であり、一般的に父親よりも家事を行っていることが多いため、女子大生は世話をされていると感じ、さらに世話をされて当たり前と感じて依存しているからだと考えられる。また女子大生と母親は同性であり、人生の先輩であ

るため、困ったときには相談しやすく頼りやすいであろうし、悩みを共有できる存在である。同時に母親も娘には援助しやすいのではないかと考えられる。また、女子大生が母親よりも父親に対して依存が低いのは、父親に決断力があると一般的に考えられているため、父親より母親を頼ってしまうと考えられる。

今回の研究によって、問題で述べた高橋(1968)の、父親より母親に依存するという研究が実証されたと考えられる。

総合討論

本研究は、女子大生の親に対する依存と孤独感において、孤独感と関連があるのか、また母親と父親への依存に違いを比較、検討していくことを目的とした。

その結果、親への依存と孤独感との間には関連はみられなかった。その理由として、社会との繋がりが多くなり孤独感を感じにくくなっていること、依存対象が親ではなく友人や恋人に移行していること、年齢が上がるにつれて親子関係が質的に変化していることが考えられた。

しかし、母親では「身体的依存」下位尺度と「経済的依存」下位尺度の間には低い正の相関がみられた。父親では「精神的依存」下位尺度と「経済的依存」下位尺度の間には正の高い相関がみられた。その理由として、大学生という立場から依存せざるを得ない状況にあるということと、安心感を得たいために、身近な大人の意見を取り入れたいという気持ちがあると推測されたためであろう。

さらに、父親より母親に依存していることが示された。これは、同性である母親との間の心理的距離が近く、悩みごとがあると相談しやすく頼りやすい存在であるからだろう。また、母親は過去に自分と同じことで悩んだ経験がある可能性が高く、共感できる部分が多いため、父親より依存する傾向にあると考えられた。

今後の課題

本研究では、作成した「親への依存尺度」の「精神的依存」下位尺度の、「一緒にいないと不安だ」は、「一緒にいると落ち着く」の逆転項目として作成した。しかし、逆転項目として反意になっていなかったため、依存尺度の項目として不適切であったと考えられる。また、今回は「親への依存尺度」として「精神的依存」「身体的依存」「精神および身体的依存」「経済的依存」という4つの下位尺度を想定して質問紙を作成したが、当初想定していた下位尺度の項目とは大幅に変わってしまった。これは、精神面に限った依存尺度にするなどの配慮が必要だったのではないだろうかと考えられる。さらに、天井効果とフロア効果が多くみられたため、あらかじめ、得点が集中すると思われる項目を予測し、作成した尺度に信頼性があるのか、予備調査を行う必要があったと思われる。また、今回は落合

(1983)の「孤独感尺度」を使用した。が、時代ともに我々が孤独感を感じるポイントは変わってきていると考えられ、併用する尺度をもう少し吟味する必要があったのではないかと考えられる。フェイスシートに関して、現在母親と父親が存命か否かや実家暮らしか一人暮らしかを尋ねたが、検討に時間を割くことができず、しっかり話し合いがなされなかったため分析で使用しなかった。今後は目的をしっかりと把握して行うべきである。

今後の課題として、年齢が上がるにつれて親子関係が質的に変化することから、子から親への依存だけでなく、親から子への依存を調査する必要があるだろう。また、依存度を年齢別に比較することも必要である。さらに、大学生になると親への依存度が低くなることから、友人や恋人への依存や、携帯電話などの電子ツールへの依存度を調査することで、主な依存対象が明らかになることが考えられる。

引用文献

Hartup, W.W. 1963 Dependence and independence. In *62 NSSE Yearbook: Child Psychology*. 333-363.

廣井亮一 (2002). 子どもの攻撃性に関する一考察：少年非行の現状を通して 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 12, 137-149.

加藤隆勝 (1977). 「青年期における自己意識の構造」 心理学モノグラフ 14, 東京大学出版会

西平直喜 (1990). 成人になること 東大出版

落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究 44, 11-22

参考文献

L. A. ペプロー/D. パールマン (編) 加藤義明 (監訳) 孤独感の心理学 1989 誠信書房

落合良行 (1974). 現代青年における孤独感の構造(I) 教育心理学研究, 22 (3), 26-34.

落合良行 (1983). 孤独感の類型判別尺度(LSO)の作成 教育心理学研究, 31 (4), 60-64.

付表1 親への依存尺度

番号	下位尺度	質問項目
1	身体的依存	外出時に手をつなぐ
2		*朝は目覚ましなどで起きる
3		食事の用意はやってもらう
4		洗濯はやってもらう
5		*自分の部屋の掃除は自分でやる
6		自分でできるようなことも親にやってもらう
7		お弁当を作ってもらう
8	精神的依存	*一緒にいないと不安だ
9		メールをする
10		電話をする
11		*常に連絡を取らなくても不安ではない
12		友人についての相談をする
13		恋愛についての相談をする
14		学校についての相談をする
15		進路についての相談をする
16		アルバイトについての相談をする
17		体調についての相談をする
18	*自分の行動は自分で決める	
19	経済的依存	買い物と一緒に行ってついでに何か買ってもらう
20		*携帯代は自分で払っている
21		親にお金をもらう
22		衣服を親に買ってもらう
23		美容院代を親にもらっている
24		自分の趣味に使うお金を親からもらっている
25		交通費は親からもらっている
26	身体及び精神的依存	書類を書くことなど面倒なことは親にやってもらう
27		親に病院に付き添ってもらう
28		*通帳、印鑑など自分の貴重品は自分で管理している
29		食事は親が作ったもの以外食べない
30		どこかへ出かけるときは送迎してもらう

註 *は逆転項目を示す。

付表2 孤独感尺度

番号	質問項目
1	*私のことに親身に相談相手になってくれる人はいないと思う。
2	人間は、他人の喜びや悩みと一緒に味わうことができると思う。
3	私のことを周りの人は理解してくれていると、私は感じている。
4	私は、私の生き方を誰かが理解してくれたいと信じている。
5	結局、自分はひとりでしかないと思う。
6	私の考えや感じを何人かの人はわかってくれると思う。
7	*私の考えや感じを誰もわかってくれないと思う。
8	自分の問題は、最後は、自分ひとりでしかないと思う。
9	人間は、本来、ひとりぼっちなのだと思う。
10	*私の生き方を誰もわかってくれはしないと思う。
11	結局、人間は、ひとりで生きるように運命づけられていると思う。
12	*私とまったく同じ考えや感じをもっているひとが、必ずどこかにいると思う。
13	私の人生と同じ人生は、過去にも未来にもないと思う。
14	*誰も私をわかってくれないと、私は感じている。
15	人間は、互いに相手の気持ちをわかりあえると思う。
16	どんなに親しい人も、結局、自分とは別個の人間であると思う。

註 *は逆転項目を示す